

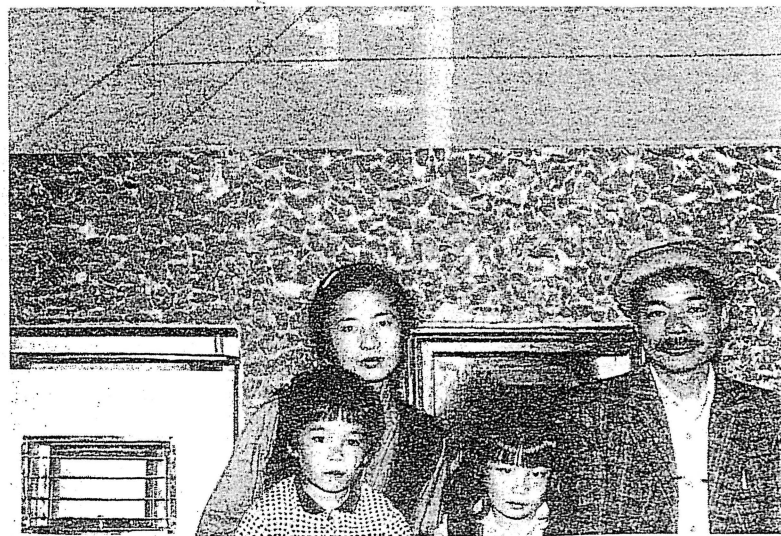
中村 哲・尚子
Dr. Tetsu NAKAMURA
c/o Japan Afgan Medical Service
University P.O. Box No.847
Peshawar, N.W.F.P.,
PAKISTAN

我が家の小さな論争

J OCS ワーカーとして最も苦しい瞬間は、「草の根と共に」を常日頃口にしながら、現実には我々もまた欧米の高級クラブの一員に過ぎぬ事を実感する時である。

先日、うちの二人の子供が通っている学校の行事のことで、小さな論争が我が家でありました。上の子は9歳で

小学校3年、下の子は6歳で小学校1年ですが、ウルドゥ語教育では帰国後の事が心配で、一昨年から出来たペシヤワールでは唯一の英語学校・インターナショナル・スクールに入学させました。問題になったのは「ハロウィーン」という米国の祭りです。子供達にとってはクリスマスに次いで楽しいお



中村ドクターと尚子夫人。秋子ちゃん(九歳)、健くん(六歳)。

祭りですから、そのこと自身をとやかく言っているわけではありません。

我々は、週に1回難民キャンプに出掛けていますが、現在パキスタンに流れて来る飢餓難民が月に4万人、更に冬を目前に十数万となるのは時間の問題で、新しく出来始めたキャンプの

実情は語るに忍びません。殆どが栄養障害の上、マラリアの罹患率が50%以上、下痢で死ぬ子供は数知れずです。インターナショナル・スクールに通学している子供の殆どは、これら難民関係の仕事でやって来た外国人の子弟の筈です。それに学校周辺にさえアフガ

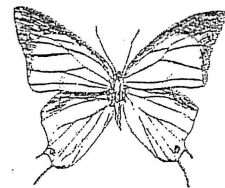
ン難民が絶えず行き交っているのです。

問題は、学校側がペシヤワールでは贅沢な高級外人クラブ(と見なされる)アメリカン・クラブと提携して派手に市内を練り歩き、クラブの中でハロウィーンという米国の祭りを傍若無人に騒ぎ立てることです。しかも、反米感情が強く異教徒に厳しい土地柄、余りに目立ちます。要するに、デリカシーを欠くのです。

何歳頃か忘れましたが、敗戦直後の混乱の場面をうっすらと子供心に覚えています。ジープに乗った米兵がチョコレートをはらまき、争ってひろっている子供を眺めて楽しんでた光景を私は忘れることができません。親の命令でチョコレートを拾って食えなかった胃の恨みのせいか、何故かこの場面は強く印象に残っていて、この時の連中に対する怒りと屈辱感を今も覚えます。私はついカットとなって、「アメ公のまねをして地元の人を馬鹿にするな」と強く言いました。

しかし、子供達にしてみれば何の事やら台点のゆくはずありません。結局私は自分の感情の押し付けの非を悟り、楽しいことは楽しいこと、と割り切ってハロウィーンの集まりに出席させました。

ところが、このような外国人の態度は、直ちに一つの事件として彼らを震え上がらせました。この直後11月初めに、ある英国の難民救済団体の管理者が行方不明となりました。恐らく誘拐されて消されたのです。この団体は良心的なキリスト教団体でしたが、「殉教も辞さぬ」一部の英雄気取りのメンバーが聖書を配るなどの「伝道活動」を



キャンプで行って、ひんしゅくを買っていたのでした。

確かに近代化された人々の目から見れば、現地は荒唐無稽なイスラムの風習に支配されているでしょう。その無知と後進性を嘲笑うこともできるでしょう。また、慣れぬ土地に居る外人にしてみれば、たまの息抜きも必要でしょう。だが、そこに自ずと節度と現地への配慮がなければなりません。現地では今、「援助」の名で闊歩している外国人への反感が高まりつつあります。私は当然だと思います。現地の人々を将棋の駒のように使い、自分の野心や業績、自己の情熱の満足の実現に忙しい彼らが、どうして信頼を受けることが出来るでしょう。決して外国人への復讐を歓迎するものではありませんが、もし自分が地元の人間だったら同様の事をしてもし不思議はなかろうと思います。

ともあれ、私としてはこのような地元の反感に同情しつつも、危険もさることながら、自分もまた、その一人たらざるを得ないという現実にはたたまれぬ感じが致します。地元にしても、外国人の横着さは我慢ならぬが、さりとて援助なくして食ってゆけないという現実があります。それでも一？という答えのない自問は大きくなるばかりの今日この頃です。